



学校だより

No.7 10月号
令和2年9月30日
横浜市立洋光台第四小学校

ホームページもご覧ください。www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/yokodai4

多文化共生を目指して

国際教室担当 高田茂行

暑さもだいぶ和らぎ、ようやく秋の気配を感じるようになりました。本年度は運動会を10月に開催いたします。運動会の練習も、教室での授業と同じように3密を避け、水分補給をしっかりと摂りながら本番に向け日々積み重ねていきたいと考えています。

さて、異国情緒あふれる横浜市で暮らす外国籍及び外国につながる児童生徒数は年々増える傾向にあり、令和元年5月現在で1万人を超え、また、その中で日本語指導が必要な児童生徒数は、2700人を超えています。今やどの学校でもそのような外国籍及び外国につながる子どもは珍しくなくなりました。洋光台第四小学校でも、20名を超す子どもたちが日々登校しています。

子どもたちの生活言語は1~2年で身につくのにに対し、学習言語を習得するには5~7年かかると言われており、教科書や授業の内容が理解できるまでには周囲のサポートがとても必要です。そのサポートの一つとして、本校では国際教室が設置されています。これは、外国人児童への指導を担当する教員を配置し、日本語指導、教科指導、生活適応指導等を行う支援事業です。

日本語指導では、日本の学校での生活や学習に適応できるよう、日常会話やひらがな、カタカナ、初歩的漢字といった文字指導などを行っています。教科指導では、授業で学習した内容を復習したり先行学習として予習したりしています。生活適応指導では、学校生活だけでなく家庭や地域で生活をするうえで困ることがないように、ふさわしい言葉や行動を教えています。

このような日本語指導が必要な児童が、一日も早く日本の学校生活に適応し日本語で行われる授業を理解できるようになるためには、日本語指導や母語での支援はもちろん、友達や教職員といった周りの人の温かい受け入れの姿勢が欠かせません。

私も私の子どもたちがまだ小さいとき、スリランカで家族と住んだことがありました。子どもたちにとっては周囲で飛び交う英語や現地語のシンハラ語などの言葉も分からず、思いもよらなかった異国の地に来て、しばらくは、「スリランカに来たくなかった。日本に帰りたい。」と何度も言っては涙を流し、その姿を見て私は、親としてとても切ない思いをしたことを覚えています。本校で学んでいる外国籍や外国につながる子どもたちにとっても、遠い異国の地である日本に来て、日本語で授業を受ける不安や困難は想像以上なのであろうと考えられます。しかし、母国語以外の環境にもかかわらず、国際教室で学ぶ子どもたちは、みな熱心に生き生きと学習に取り組んでいます。時には自分の思いや考えをうまく言葉で伝えることができないために友達とぶつかってしまうことがあります。本人の努力や友達の助けを借りながら上手に接している姿も多く見られます。

本校では、多様な教育的ニーズに対応した教育を推進してきています。また、学校管理職をはじめ校内教職員が共通理解を図ったうえで、連携して子どもたちが安心して過ごせる環境を整えることも大切にしており、これからも、お互いの「違い」を認め合い、理解し、尊重することのできる多文化共生を目指した学校づくり、学級づくりを行ってまいりますので、保護者の皆様方の変わらぬご理解ご協力のほどよろしくお願いいたします。